

鳶が建物をつくる

日本の建築職人の中には、鳥の名を持つ人たちがいる。彼らは「鳶」と呼ばれ、その名の由来は諸説あるが、地上何十メートルもの高所を軽々移動する仕事姿にあるとも言われる。鳶の起源は江戸時代まで遡り、消防活動や冠婚葬祭の執り行いなど、地域コミュニティーの中心的役割を担っていた。名残として現代も東京下町では、三社祭、神田祭などの山車や神輿は鳶が手掛けている。

建造物の枠組みを作ること、足場を組んで他業者の人が安全に効率よく作業できるようにすること、大型の機械の据え付けや解体を行うこと。鳶の仕事は主にこの3つである。その鳶の仕事を「建設現場の要」と語るのは、東京都江戸川区にある力丸建設の一級鳶職人、岩楯誠二さん(34)だ。鳶職に就いていた父親に憧れて、中学卒業後迷いなく鳶業界に入った。がむしゃらに働いていたので仕事を覚えるのが楽しかった、と彼は言う。

楽しさの記憶と共に大変な思いも多かったそうだ。鳶の仕事は重労働な上に命の危険が伴う。自身の身長、体重をはるかに超える大きな資材を運び、時には100メートル以上の高さにある幅10センチ程の梁の上で、命綱一つで作業をすることもある。岩楯さん自身、高所から転落しかけたことや、物を落としかけた経験はある。しかし毎回ギリギリのところまで事故は免れ、18年間一度も大きな怪我をしたことがないという。

「怪我をしたら辞めます。恥ずかしいので。そのくらいのプライドでやっている」

安全に仕事を行うためには、現場での気配りや一工夫が重要だ。一人前の鳶職人には、危険を事前に予測し防ぐ能力が、技量や知識と同じぐらい求められるのである。

現在岩楯さんは現在、フォークリフトの操縦資格取得を目指している。より多くの高い技術を身につけ、出来る仕事を増やすことは彼にとってやりがいだ。

「純粋に高いところに登るのが好き」

「鳶職が一番いいと思う」

早くから憧れの職をつかみ、今もなお向上心を持ち続けている岩楯さんの姿は、仕事に打ち込む大人としてとても魅力的に映った。

佐藤萌、松本啓吾